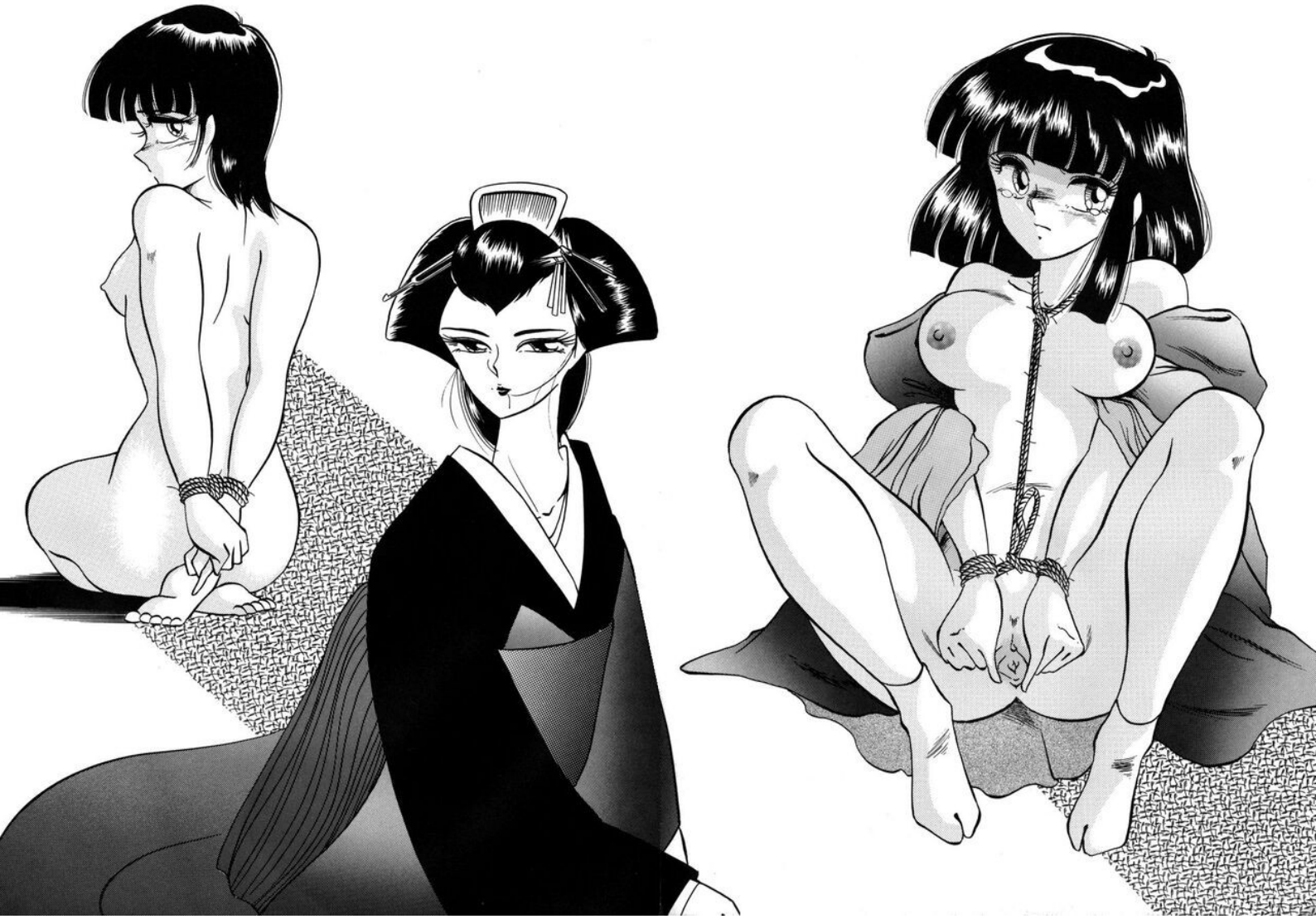
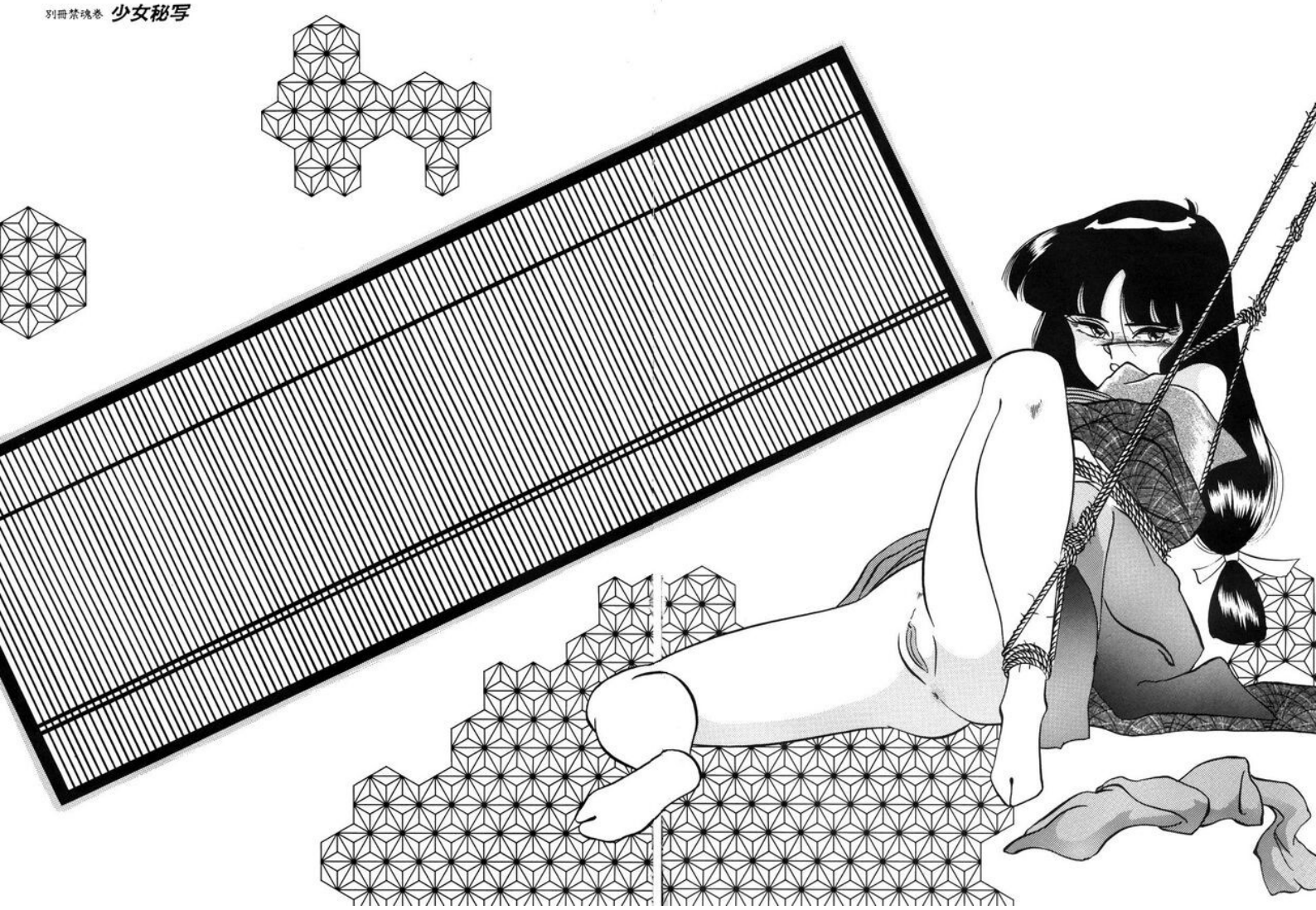
少女秘写
02

少女秘写
ダーティー岡本

少女秘写

別冊禁魂巻





ところでSMは生ける力を姓名のない物質に行うことではない。およそ、絶対的受動のようなものはSMとは云えないだろう。

SMは常に二個の生ける力の衝突である。

それだから強力の行使の目標なるものが双方について考えられねばならないのである。

前号において「ＳＭはある種の男女間闘争」ということを述べたが、我々としては差し当ってＳＭを構成している究極の要素、即ち二人のあいだで行われる決闘であることを考察するとしよう。決闘とは要するにいずれも物理的な力を行使して我が方の意志を相手に強要しようとするのである。即ち彼が端的に目的とするところは、仮に女性であるなら完全に、精神的物理的に完全に打倒しておよそ爾後の抵抗をまったき不可能に至らしめるにある。してみるとＳＭにおける暴力は一種の強力行為であり、強力行使であろう。

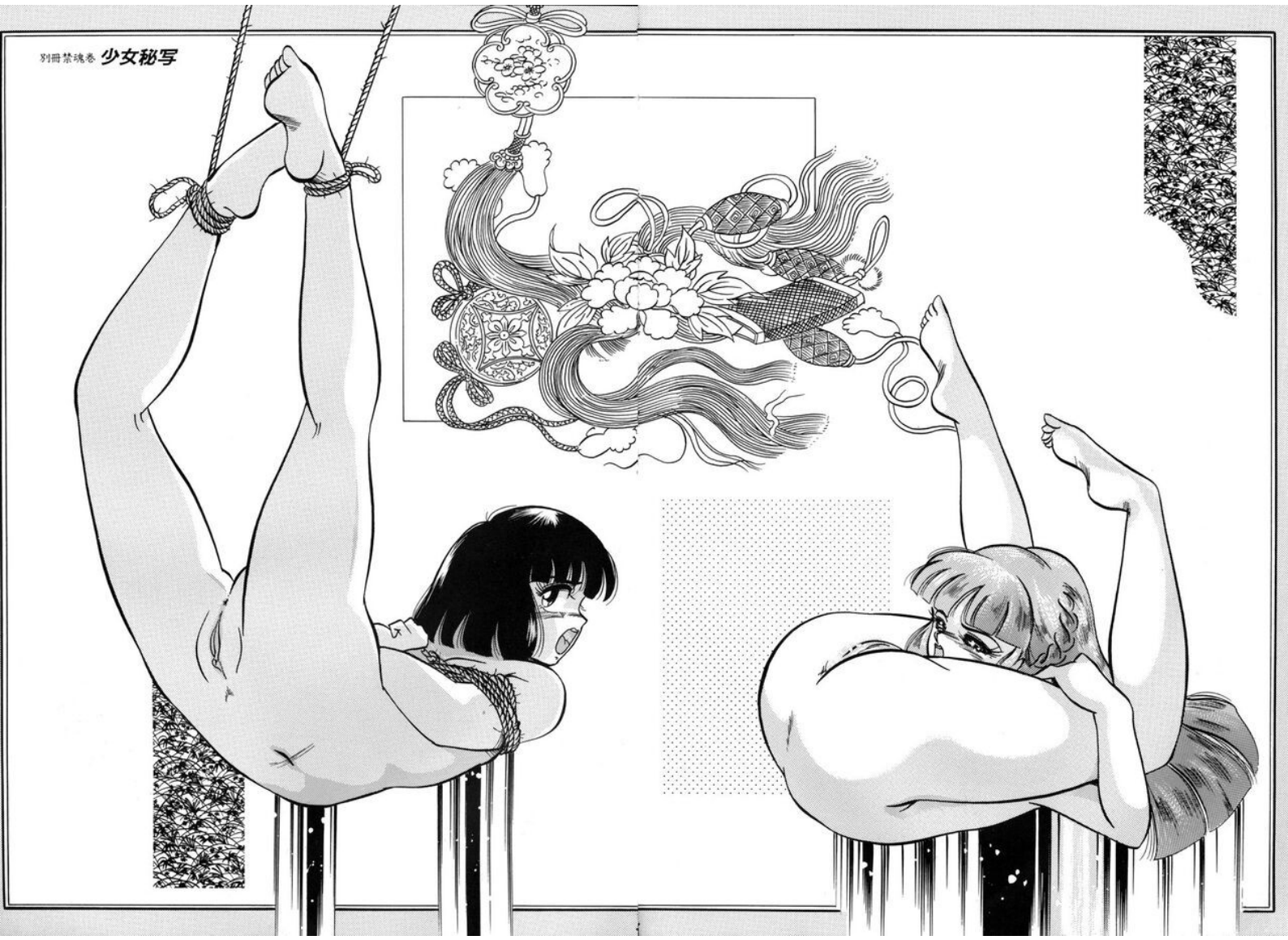
ところで人道主義者どもは主張する。相手の抵抗を排除する以前に抵抗する要因を排除すればよい、と。和姦の発想それ自体としてはいかにも結構至極である。いたずらに過大な損傷を与えるには及ばないであろう。しかし我々はかかる〇見を打破しなければならない。ＳＭのような危険な事業においては善良な心情から生じる〇見こそ最悪のものだからである。

ＳＭというものが物理的強力を全面的に行使すると云っても、それは決して知性の協力を排するものではない、それだからかかる強力を仮借なく行使し、流血を厭わずに使用する者は相手に同じことを行わさせぬ様にさえすれば優勢を占める。彼は自己の意志を、いわば掟として相手に強要するのである。しかし彼我双方がいずれも相手に対し同じことをするなら、強力行使は次第に昂じて極度に達することになる。

これを制限するものこそがＳＭにおける限界であり可能な範囲に他ならない。

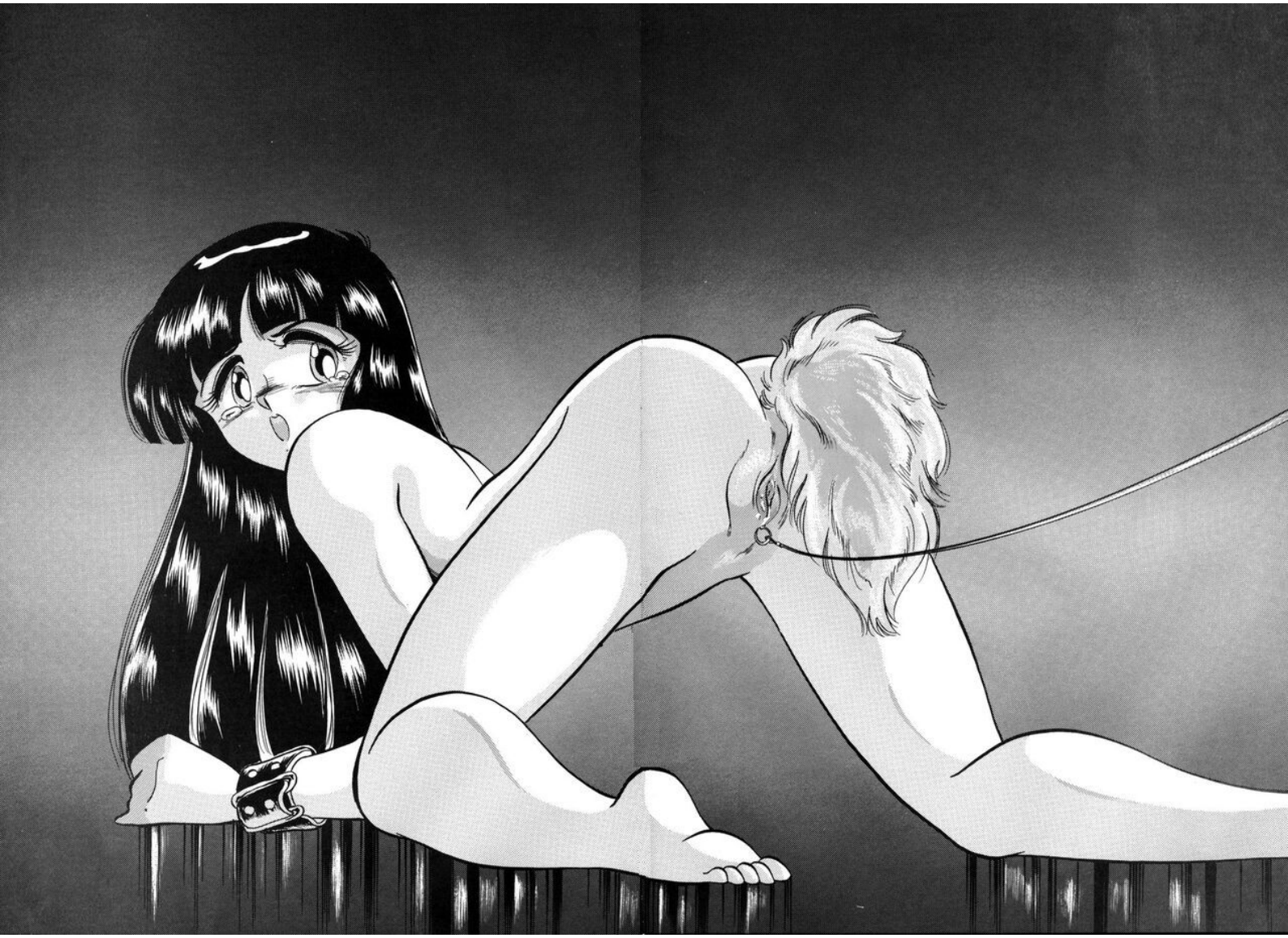
ＳＭに含まれている粗野な要素を嫌悪する余り、ＳＭの根源的問題を無視しようとするのは無益な考えである。

ＳＭは一種の対人間の強力行使である。そしてかかる強力行使には限界が存しない。それだから自己の意志を掟として相手に強要するのである。（第一の交互作用）



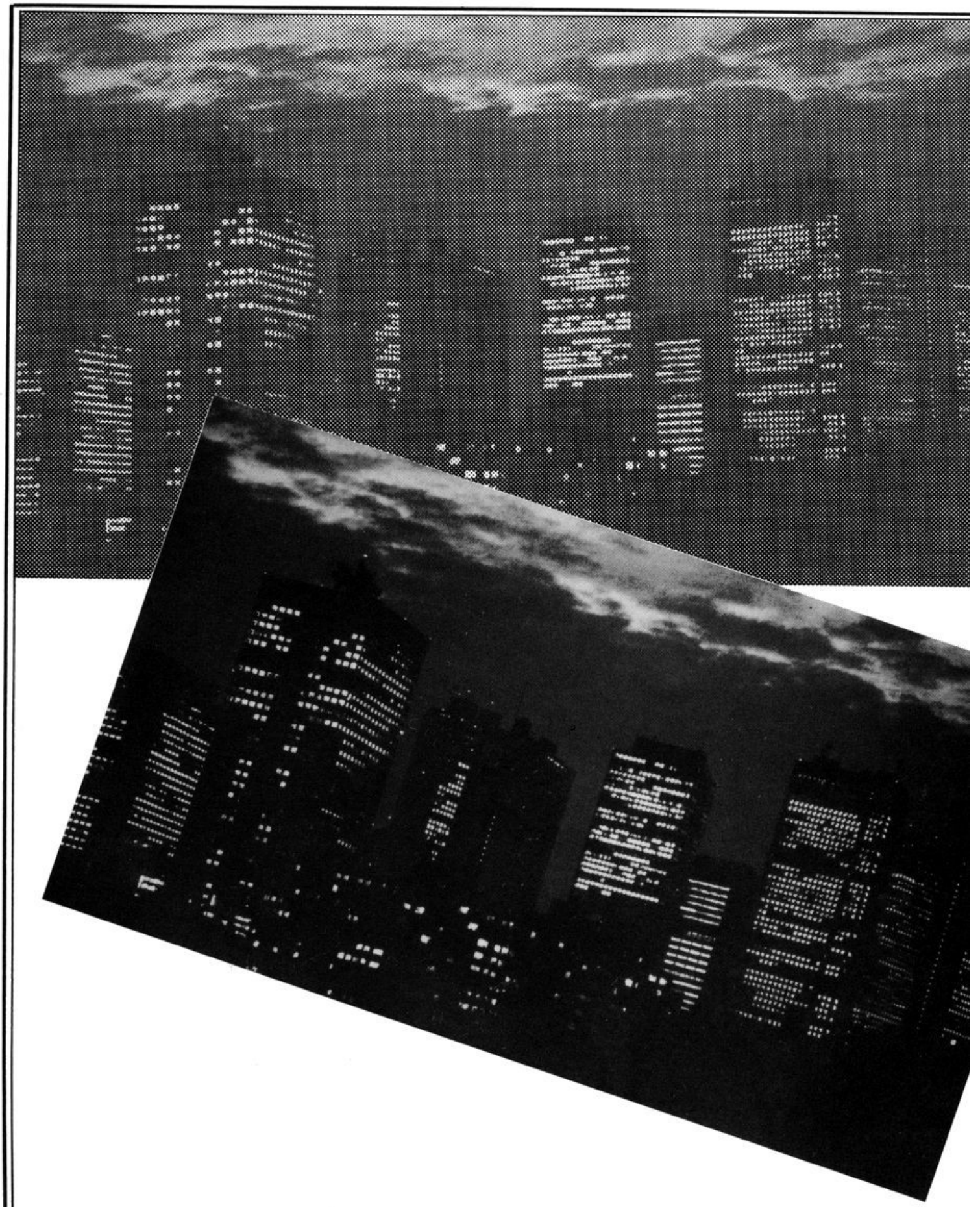
余話として

場合によっては、人を屈服させるのに、非情で暴力的な行為より温情に満ちた人間的な扱いの方が、有効であることがある。何にせよ、結果さえよければ、手段は常に正当化されるのである。



街

民衆ほど軽薄で守備一貫とは程遠いものは無い。歴史家ティトウス・リヴィウスは述べる。「卑屈な奴隷か、さもなければ傲慢な主人かこれが民衆の本質である」



余話として

拘束者が被拘束者の憎しみを買うのはいかなる理由によるものであろうか。

その理由の最大のものは、被拘束者が最も大切にしているものを、拘束者が奪いとってしまった場合である。

何故なら、人間は自分が最も大切にしていたものを奪われたときの恨みを、絶対に忘れない。しかも、その「もの」が、日々必要なものである場合はなおさらである。必要を感ずるのは毎日なのだから毎日恨みを蒸し返す事になる。

これまで述べつつある諸々の考察は戦術と戦略との双方に互る事項である。そこで、まず戦略だけに関係する極めて重要な事項を述べておかねばならない。防御とは、攻撃に匹敵する要件である。ＳＭを主導するにおいて強固な意志力は攻略する側にのみ存するという浅薄な論者は、ＳＭをプロセスとのみ考えるであろう。例えば、ＳＭを構成する主素の一つである女性器への直接的打撃は必ずしも女性、或いは男性の決定的打撃にはならない。

それは内線という概念によって容易に解説しうるであろう。

（戦術においてはＳＭにおける防御者側の運動は攻撃者の眼前で行われると云って良い。従って外線にある攻撃者は大概の場合効果を直ちに認めることができる。しかし、防御における内線、即ち内的精神防御は外から感知するのは、現場の混乱状態からは困難である。たとえば口を閉ざしてしまうなら、内的運動を偵知するところか何を隠蔽し防御しているかを知ることすら極端に困難である。内線の軽視はかかる隠蔽の有利を知らないからと断言し得るのである。）

防御の主旨は、敵の攻撃を拒止するにある。また、かかる拒止には、敵を待ち受けるという動作が含まれている。そのことを、次巻において述べることにしたい。

何事によらず精確を旨とする人間性は常に明晰と確実とを求めてやまないにせよ、しかし人間の精神はしばしば不確実なものに惹かれる。まこと、SMはカメレオンの如く、いちいちの具体的な場合ごとにその性質をいくらかずつ変えてしまう。しかし、それ　りでなくSMという「現象」を全般的に考察すると、SMに含まれている三通りの主要な傾向に応じて、奇異な三重性を帯びているのである。

第一に、SMの本領は原始的な強力行為にあり、この強力行為は殆んど盲目的な自然的本能とさえ云えるほどの憎悪と敵意とを伴っている。

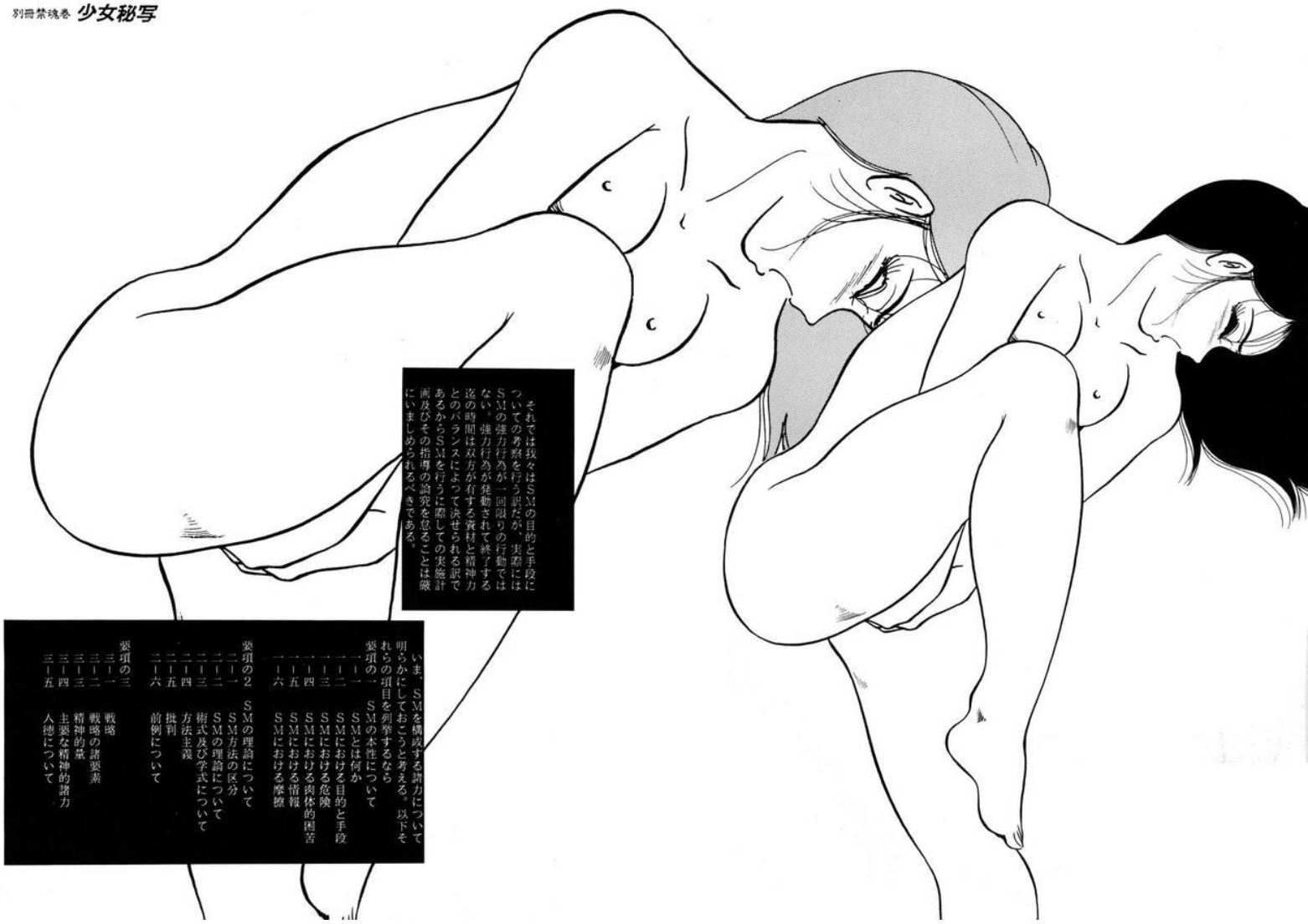
第二に、SMは確からしさと偶然との糾う博戯であり、またこのような性質がSMを当事者の自由な心的活動たらしめる。

第三にSMは交渉の道具であるという従属的性質を帯びるものであるが、しかし亦、かかる性質によってSMは専ら打算を事とする知力の仕事となる。

このような三重性はそれぞれ相異なる三種の法則を与える。それは無論、相乗するものであるから、いたずらに任意な関係を仮定することはいたつて無益である。

しかしながらSMの概念を定義することはSMの基礎構造を解明する光明であり、我々はこの光を便りにしてSMを成立せしめているおびただしい要素をそれぞれ分離し、次にこれを類別することができる。

漫



それでは我々はSMの目的と手段についての考察を行う訳だが、実際にはSMの強力行為が一回限りの行動ではない。強力行為が発動されて終了する迄の時間は双方が有する資材と精神力とのバランスによって決せられる訳であるからSMを行うに際しての実施計画及びその指導の論究を怠ることは厳にいましめられるべきである。

いま、SMを構成する諸力について明らかにしておこうと考える。以下それらの項目を列挙するなら

要項の一　SMの本性について
一一一　SMとは何か
一一二　SMにおける目的と手段
一一三　SMにおける危険
一一四　SMにおける肉体的困苦
一一五　SMにおける情報
一一六　SMにおける摩擦

要項の2　SMの理論について
二一一　SM方法の区分
二一二　SMの理論について
二一三　術式及び学式について
二一四　方法主義
二一五　批判
二一六　前例について

要項の三　戦略
三一一　戦略の諸要素
三一二　精神的量
三一三　主要な精神的諸力
三一四　人徳について
三一五

三―六　勇敢
三―七　堅忍
三―八　対人的優勢
三―九　奇襲
三―一〇　詭計
三―一一　時間における強力の集中
三―一二　時間における強力の集合
三―一三　予備
三―一四　経済的諸力について
三―一五　幾何学的要素
要項の四　実施
四―一　概観
四―二　近代のSM行為の性格
四―三　実施の一般について
四―四　実施の一般について（承前）
四―五　SMの持続時間
四―六　SMにおける勝敗の決定
四―七　SMにおける彼我の合意
四―八　本番
四―九　本番（続き・一）
四―一〇　本番（続き・二）
四―一一　本番に到る戦略的手段
四―一二　失敗後の退却
四―一三　意義
四―一四　夜間の襲撃行為（強姦）
要項の五　実施に伴う戦闘力
五―一　概観
五―二　舞台、時間
五―三　彼我双方の体力の比率

（以下は次々頁に追加されるであろう）

およそ万物は混沌から脱出しようとする動きから
「発生」し「存在」出来るのである。
「混沌」から「抽象」へ――
言語に始まるあらゆる人工物は混沌からの脱出
すなわち数によって規制された運動であり
度量によって制限された量である。
それは世界が数的調和と幾何学的整合の上にのみ
成り立つというヨハネス・ケプラーの思想に結実した。
しかし、である。
世界はユークリットのみで成立するのではない。
ロバチェフスキーの云う曲率即ち「円」は
ユークリットの決定論的絶対マニエラとは異なる。
円とは実は数的整合あるいは物理的安定を
発生と実存に置くものではなかったのだ。
回転の曲率のみが直線幾何学による「直線」の限界
を突発しうるのである。
歴史と感覚を超克する円とは我々の事だったのだ。
われわれはこの一書に数年を費やしてしまった。
SMが直線と円の対決である事を見抜けなかったせいであった。
社会的直線と曲率を運動因とする感情円、その不和の残響と数学
的和声の崩壊音こそがSMなのであると検証するにはわれわれの
内なる宇宙観の存在と発揮を必要とする。
東洋ではこれを「般若」と呼ぶ。
わたしが最終的に提供できると確信するものも
「天なる般若の気配」を告げることにある
さもなければ――、万事を星屑に還したまえ！

企画――企画管制本部
編集――禁魂巻編集班
編集委員――山崎正司＋北岡昌一＋三田笙
発行者――U・C・JUPITER

ブックデザイン――佐藤明
カリグラフ――矢沢健
本文イラスト――ダーティ岡本＋星野勇気

少女秘写02

ダーティ岡本